



平時の校長、有事の校長

浦安市立富岡小学校長 かつた ひでき 勝田 秀樹



1 非常時こそ平常にしている

令和2年3月、臨時休業中のため縮小した卒業式を行った。出席者は卒業生と保護者、教職員である。来賓や在校生は出席していない。

感染拡大防止のため、入退場と卒業証書授与で登壇する時以外はマスクを着用した。歌も着用したまま歌った。実質、卒業式練習はほとんどできなかったが、卒業生は立派な態度と所作で卒業していった。(同時に例年よりも少ない時間で卒業式の準備ができることがわかった。よって本年度は、はじめから少ない時間で準備をする。)

式後、保護者が作成した卒業記念DVDを鑑賞する時間が急遽設定され、式に出席した全員で鑑賞した。そこで代表の保護者がこんな挨拶をした。

「2月27日夕、安倍首相が全国の学校を3月2日から一斉に休校にすると突然発表した。その発表を聞いたとき、親も子も学校はどうなるのだろうと不安で心配で仕方なかった。しかし、翌28日朝、学校の前を通ると、校長がいつものように笑顔で挨拶をしていたので、学校は大丈夫だと思い、とても安心した。」

実は2月28日朝、いつものように校門で挨拶をするかどうか一瞬迷った。報道に接した保護者からの問合せがあり、対応に追われるだろう。児童も教職員も不安になっているだろう。いつもと違う朝だ。校長は校長室や職員室に待機していた方が良いのではないかな。

いや、だからこそいつもどおり挨拶をする

ことを決めた。朝一番に臨時の職員打合せをすることだけ伝え、校門に立った。

案の定、登校してくる多くの児童の目はとても不安そうである。(マスクをしているので、余計に目立つ。)特に配慮が必要な児童ほど、その傾向が強いと感じた。

何人もの児童から質問を受けた。

「先生、学校どうなっちゃうの?」

私の答えは次のとおり。

「学校は大丈夫だよ。」

ところで、9年前の東日本大震災発生当時、私は市立幼稚園長だった。浦安市は市の面積の8割以上が液状化の被害を受けた。甚大な被害を目の当たりにして不安な職員に対し、「大丈夫。何とかなる。」と励まし続けた。もちろん根拠などは全くない。励まし続けただけだ。

当時の職員から、

「あの時、園長が『大丈夫』と言ってくれたので、ほっとしたことを覚えている。」

と今でも言われる。

校長は非常時だからこそ平常にしている。そして、校長は特別な感情を露わにしないように気をつけている。

もちろん楽しい・うれしい・喜びといったプラスの感情は、露わにするよう努めている。

反対に、怒りや不安・焦り・悲しみといったマイナスの感情を極力、人前で露わにしないようにしている。露わにすると、周りの職員の意欲が低下してしまう。(少なくとも私はそうだった。)

ただし、一人でいるときは違う。そこで自分の感情を吐露し、正直に向き合ったり、適切に発散させたりしないと心身とも「ゆがみ」が生じる可能性がある。

2 あえて非常時を生かす

この原稿を書いている6月現在、学校が再開した。再開自体は喜ばしいことではあるが、平常に立て直すために解決すべき主な課題は次のように山積している。

- ・前年度未学習分の指導と評価をどうするか
- ・「主体的・対話的で深い学び」をどうするか
- ・年間指導計画の見直しをどうするか
- ・家庭学習分の評価をどうするか
- ・新学習指導要領をどうするか
- ・評価項目と基準（規準）をどうするか
- ・各活動全体計画の見直しをどうするか
- ・行事の削減をどうするか
- ・心のケア（児童・教職員）をどうするか
- ・感染拡大防止対策をどうするか
- ・関係諸機関・団体等との調整はどうか

主な課題だけでもこれだけある。しかも一つ一つが、大きくて重い。

私は、この3月から5月にかけて職員に繰り返し伝えたことがある。

「現在は非常時である。いつものこと、例年のことが通用しない。逆に考えれば、今しかできないこと、今だからこそできることがある。今はピンチをチャンスに変えることができる。一人一人の経験と英知を結集し、この非常時に当たってほしい。」

そこで、年間指導計画について例に挙げた。

- ・各学年で当該学年の見直しを行うこと
- ・「育成したい資質・能力」を再確認し、単元（題材）の精選を行うこと
- ・単元（題材）の軽重を行うこと
- ・学習指導要領に2学年分の内容がまとめて

記されている教科では、次年度に指導すべきことを必ず引き継ぐこと

この見直しは、各自または少数で協議しながらできるカリキュラムマネジメントである。この時期だからこそ、教職員全員が教育課程の編成に当事者意識をもって参画できる。

3 非常と平常は表裏一体である

校長として着任した昨年、折に触れ教職員に言ってきたことがある。

「学校には課題や問題が必ず発生する。学習・生徒指導・特別支援・健康面の他、事故や怪我也必ず発生する。発生したとき私たちは『困ったな。どうしよう。』と思う。思っ
て良い。普通だ。しかし、発生したことは、私たちにとっては指導の絶好の機会であり、児童にとっては成長の絶好の機会である。また、発生を未然に防ぐ、発生しても被害や影響を最小限に留めることは当然である。よって発生することを前提で計画・準備をするべきである。つまり『発生したらどうしよう』ではなく、『発生したらこうしよう』と意識をして実践に当たってほしい。」

以上、「私の教師道～学校を創る～」をテーマに普段実践していること、考えていることを中心に毎日を振り返って書いた。書いてある内容は、私自身への戒めであり、私自身が最も気をつけるべきことでもある。書く機会を与えてくださった皆様に心より感謝を申し上げます。

なお、本稿の題名は、故佐々淳行氏の著作を参考にした。危機管理について氏の著作から多大なる示唆を受けた。この場を借りて佐々氏にも感謝を申し上げます。



チーム・組織として進める学校運営

四街道市立旭中学校教頭 こめもと けんじ
米元 賢志



1 はじめに

本校は、四街道市の南東部に位置し、緑に囲まれた自然豊かな地域にあり、約360名の生徒が在籍している。

学校教育目標は「豊かな心を持ち、主体的に未来を切り拓く生徒の育成」であり、その具現化を進めるため、校長の指導を得て、取り組んできた。

2 新任教頭研修を振り返って

令和元年度、年3回県総合教育センターで実施された研修においては、学校の管理・運営に関する諸問題について理解を深めるとともに、教頭としての役割や心構えについて考える機会となった。

また、本県の最も大きな課題として、働き方改革、不祥事根絶、人材育成が挙げられており、本校においても年間の重点課題としてその解決に取り組んだ。

3 教頭として心がけたこと

学校が保護者や地域から信頼されるためには、教職員が子供たちのために一つの目標へ向かって組織的に教育活動に当たることが最も大切であると考えている。

そのために、まず、校長の学校経営方針を熟考し、理解を深めた上で校長と意見交換を行い、学校教育目標の具現化に努めた。

次に、教職員との協力・調整を図るために、職員会議や打合せ等で共通の目標を共有化した。

そして、学校運営、授業や行事等の教育活動を進めるに当たっては、個業化を排し、チーム・組織で取り組むことを徹底させるようにした。

4 本校の実践

(1)働き方改革の実践

働き方改革の目的は、「これまでの働き方を見直し、自らの授業を磨くとともに日々の生活の質や教職人生を豊かにすることで、自らの人間性や創造性を高め、子供たちに対して効果的な教育活動を行うことができるようになること」である。

そのために、以下の取組を行った。

①意識改革に関すること

パソコンやタイムカードによる時間管理を実施し、勤務時間を職場全体で意識するとともに、計画的に業務を進めることを推進し、限られた時間の中で必要な取組を行うようにさせた。

また、計画的な年次休暇の取得を促すとともに、管理職が率先して年次休暇の取得や定時退勤を行い、ワークライフバランスの推進に向けた職場風土の醸成に努めた。

②会議に関すること

会議時間は原則1時間以内、勤務時間内に行うことを徹底し、校内PCを活用することで、会議のペーパーレス化を図り、資料の印刷や配付に係る時間を削減した。

更に、朝の打合せは、月・木曜日の2回、主任会議は週1回から2週に1回とする等、

会議の日数を縮減した。連絡事項はメールや校務支援システムを活用し、情報共有を図った。

③学校からの連絡に関すること

学校だよりに学年だより、保健だよりを整理・統合することで、各種たよりの作成業務を軽減し、連絡メールの活用により、配付文書の精選を図った。

④校務分掌・学校行事に関すること

体育祭等の駐車場係の負担をなくすために、民間警備会社に駐車場の整理を委託した。引き継ぎ業務の可視化を図り、業務内容の視覚化、分掌ごとに引き継ぎフォルダを作成することで、効率よく業務を推進できるようにした。

⑤部活動に関すること

部活動ガイドラインを作成し、平日は2時間程度の活動で週1回は休みとした。土日のどちらかは休みとし、3時間の活動とした。また、部活動指導員の活用やボランティアによる指導補助を依頼することで教職員の負担軽減を図った。

取組を始める前は、教職員の中に業務を縮減することや新しい取組への不安や心配があったが、徐々に定着し、業務軽減による余裕が生み出されたと考える。

(2)不祥事根絶に向けて

一度でも不祥事が起こると、生徒・保護者・地域からの信頼が崩れ、それを取り戻すには、膨大な時間と努力が必要となり、教育活動へも多大な影響が出ることから、絶対に起こしてはならないことである。

本校での不祥事根絶の取組は、①生徒・保護者対象に年4回のわいせつ・セクハラ・体罰に関する調査②教職員への毎月の調査③生徒指導を行う際の複数対応④月に1度の不祥事防止に関する研修会⑤職員打合せや職員会

議、不祥事に関する報道等の機会を捉えての管理職による指導等が挙げられる。

継続した不祥事根絶の取組は確実に教職員の意識を向上させ、自分の学校から不祥事を絶対に出さないという覚悟で教育活動に当たることができている。

(3)人材育成の計画と活用

教職員の指導力を向上させるためには、計画的・継続的な人材育成の推進が重要であり、本校では以下について重点的に実施した。

①計画的な人材育成について

一人一人の教職員の特性やライフステージを把握した上で、学校教育目標の重点項目と関連させ、身に付ける力を明確にし、研修に取り組んでいる。

また、目標申告シート、職務能力発揮シートの作成や面談を通して、進捗状況の確認や評価を行い、常に目標を意識しながら職務に当たるようにしている。

②ミドルリーダーの活用について

主任やミドルリーダーをメンターとし、若手教員と日々の教育活動や校務運営に当たることで、お互いが支援・助言・相談をするように取り組んでいる。

更に、普段からのコミュニケーションを緊密にし、職場の連帯感やチームワークを育むことに力を入れている。

5 おわりに

本校教職員は、チームワークの重要性を理解し、どんな困難も、共に乗り越え、学校としての力をつけていくことができた。

今後も、子供たちが通いたくなる学校、地域・保護者が応援したくなる学校、教職員が働きたくなる学校づくりの実現のために日々研鑽を積んでいきたい。



「つなげる」「つながる」を テーマとして

県立仁戸名特別支援学校主幹教諭 たかはし けいこ 高橋 敬子



1 はじめに

本校は「病気の治療」と「学校教育」を両立し、全県を学区として病弱児童生徒を対象とする特別支援学校である。隣接する千葉東病院に入院する児童生徒、自宅から通学する生徒、千葉東病院以外の千葉市内の病院に入院する児童生徒が在籍しており、入退院に伴い、年間約140件の転出入がある。

2 新任主幹教諭研修から

昨年度、県総合教育センターの新任主幹教諭研修を受講した。初回の研修会で、メジャーリーグの大谷翔平選手が高校時代から用いている目標達成シートを活用し、主幹教諭としての課題を考える時間があった。本校で初めての主幹教諭の配置ということもあり、自分が何をすべきかつかみきれずにいた時期の研修であった。目標達成シートに主幹教諭としての取組を書き出すことで、学校としての課題を改めて考えるとともに、必要な業務などについて分類・整理する機会となった。この研修を機に、兼務していた特別支援教育コーディネーターとしての就学や教育相談、その他人材育成といった業務などについて、自分の仕事の軸となるものを整理しながら取り組むことができるようになった。

3 「つなげる」ことを意識して

(1) 学校運営として

本校の教育課程は、小・中・高等学校に準ずるものや自立活動を主としたものまで幅広く、学習の場も本校や千葉東病院、千葉市内の他病院など様々である。全校行事であって

も一堂に会することが難しい中、職員同士が、共に考え、支え合うことの大切さを痛感している。主幹教諭として、学部・学級間のつながり、保護者とのつながり、病院等の連携機関とのつながりを大切にしながら学校運営に関わることを心がけている。

特に、今回のコロナ感染症対策として取り組んできた各部の取組やその進捗などを職員会議等の場で全体に周知することをはじめ、児童生徒の情報や分掌の活動など、必要に応じて適宜共有し、学校の中を「つなげる」ことを意識した働きかけを進めている。

(2) 人材育成として

人材育成、特に若年層の育成は主幹教諭に求められる大事な仕事の一つである。研究や研修担当と連携し、学校としての課題に対応する研修会を企画すること、若手とベテランをつないで日々の実践について学ぶ場を設けることなどが必要と考える。昨年度は「アセスメント」を取り上げて行ったが、本校の課題や職員のニーズを把握した上での希望者参加型の校内ミニ研修会等について、今年度も引き続き実施していきたい。

4 おわりに

現在、学校は、感染症拡大防止のための長期の休校、そして段階的な再開と、これまでにない状況の下で運営を行っている。今だからこそ、学部間を「つなぐ」総合的な調整が必要と考える。病気や障害のある子供たちが安全に安心して学校生活を送れるよう、先生方と協力して取り組んでいきたい。



コミュニケーションの大切さ

松戸市立六実小学校教諭 にしかわ 西川 たくま 琢麻



初任者としての一年間は、初めて高学年の担任となったということもあり、講師時代とは違った悩みや迷いを抱くことが少なくなかった。そんなとき、初任者研修で同期の仲間が集まり、ディスカッションなどを通して情報や意見を交換することで、解決の糸口を見出すことができた。また互いに話をし、聞いてもらうだけでも気持ちが晴れた。初任者研修で私が感じたことを生かし、現在、勤務校では二つのコミュニケーションを意識して取り組んでいる。

一つ目は、教員同士のコミュニケーションである。学級で起きた問題を一人で抱え込むことなく、些細なことでも学年の先生方、必要があれば管理職や学校全体にも伝えるようにした。そうすることで学級の実態を知ってもらうことができ、教員間でも良い関係が築いていけると考えたからである。

二つ目は、児童とのコミュニケーションである。昨年度からの持ち上がりで、今年度は6年生を担当している。学級の子供たちは様々な悩みを抱える時期であり、私は、児童の話を傾聴し寄り添えるよう、積極的にかかわりをもち、児童理解に努めたいと考えたからである。

児童の成長のためには、教員だけでなく、保護者、地域、関係機関など、たくさんの人々との協力が不可欠である。これからも多くの人々とのコミュニケーションを大切にし、児童と共に成長できる教員になりたい。



初任者研修を通じて学んだこと

市川市立第四中学校教諭 やまざき 山崎 ひろゆき 浩之



私は、昨年度、初任者研修に参加し、多くのことを学んだ。その中で、特に大切にしたいことが二つある。

一つ目は、常に新しいものを吸収し、それを効果的に利用することである。昨年度、市川市では各教室に大型テレビと書画カメラが導入された。ICTを用いて視覚に訴える工夫をした授業づくりが求められている中、研修で学んだことを実践すると、生徒が惹きつけられていくことを肌で感じた。今後も授業で積極的に取り入れ、生徒の発表や説明の機会でも活用していきたい。

二つ目は、研修で講師の先生から頂いた「初任者かどうかは、生徒や保護者には関係ない」という言葉である。昨年度、初めての担任が三年生で、進路指導もあり、正直多くの不安があった。しかし、目の前の生徒や保護者にはベテランも若手も関係ない。経験の少なさをカバーできるのは、誠意と準備、そして何よりも生徒のことを第一に考えた行動だと考え、実行した。卒業式での生徒の様子を見て、自分の思いが少しは伝わったのではないかと実感した。今後も生徒に対する熱い思いを持ち続け、初心を忘れずに、研鑽を積んでいきたい。

最後になるが、心に留めていきたい言葉を紹介する。“言行一致”である。言っていることとやっていることが一致していなければ生徒もついてこない。自分自身が生徒の模範になれるよう日々学び続け、生徒と共に成長できる教員でありたい。



主体的に考え、互いに認め合う 道徳授業を目指して



睦沢町立睦沢小学校教諭 やまうち 山内 ゆり

1 はじめに

小学校で「特別の教科 道徳」が実施されて3年目になる。「考え、議論する道徳」の実践が求められ、児童が物事を多面的・多角的に考えられるよう、実態に応じた指導をしていくことが重要となっている。

私は、道徳の授業は、児童が臆せず発言できる絶好の場と考える。「道徳って自分の意見を言えて聴いてもらえるから楽しい」と感じさせられることが、「考え、議論する道徳」にもつながり、互いに認め合う授業になっていくと考える。

2 授業での取組

(1)学習形態の工夫

①ラウンドテーブル

「ラウンドテーブル」という学習形態を道徳の時間の基本的スタイルとして実践している。全員前を向いての座席形態では、互いの表情がみんなには伝わりにくい。誰からもみんなの顔が見えるコの字にもう少し丸みを持たせた「ラウンドテーブル」形態にするとお互いの発表を大切に聴こうという気持ちが育ちやすい。また、ラウンドの中央部分は役割演技の舞台になったり、教材の読み聞かせの時に集合して座るスペースになったりと学習形態に変化を与え、集中力が途切れることなく授業に取り組める。

②ペア・グループ学習

低学年ではペアによる対話、中・高学年ではグループでの話し合いという形態も、多様な

考えを引き出すために有効と考える。私は、全体での話し合いの前に取り入れることが多い。少人数での対話では、緊張せずに思いを伝えやすいので、「自分の考えを言えた」という自信がわき、全体での話し合いでの発表にもつながっていく。

(2)全員発表

道徳の時間の中で全員が発表する機会を設け、全員に活躍の場を与えることに努めている。このとき、全員が自信をもって発言できるように、教師も児童の意見に共感を示すようにすることが重要となる。一人一人の意見を聴くことで、学級全員で学ぼうとする気持ちが感じられると共に、話し合いに深まりも出てくる。発表に対して消極的な児童も、回を重ねていくうちに自分の考えを発言するようになっていく。全員発表が定着すると、発言への意欲と周囲の考えに共感する力が育ってくると考える。

(3)学年道徳

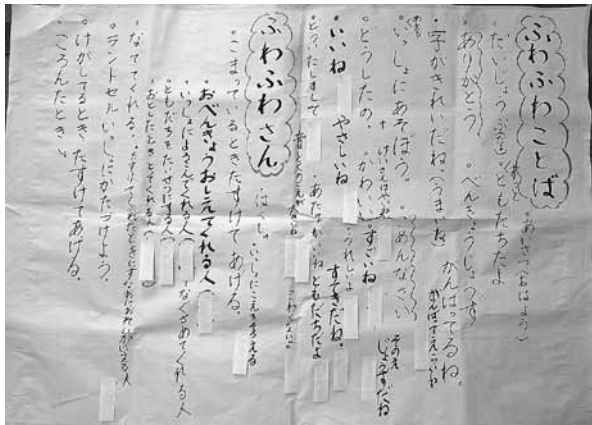
学年で学級数が複数ある場合は、学年道徳を行うことも有効な手法と考える。学年で同じ空間を共有することで道徳意識を高めるとともに、指導について学年内での共通理解も深まる。

実践1 1年B(6) 親切・思いやり

「ふわふわことば」と「ちくちくことば」

「ふわふわことば」と「ちくちくことば」という取組は多くの学校で実践されていることだろう。低学年では「親切・思いやり」「友情、信頼」「個性の伸長」など様々な内容項目の授業として実践することができる。昨年

度は学年道徳として、授業参観の日に行った。言葉だけでなく、「ふわふわさん」「ちくちくさん」として行動にも目を向けさせた。人を傷つける言葉や行動、温かい言葉や行動をワークシートに思いつくだけ書いてから発表させた。授業での発言は模造紙に書き、授業後は学年前の廊下に「ふわふわことば」「ふわふわさん」のみ掲示した。更に、日常で見つけた温かい言葉や親切な行動を付け加えられるようにしたことで日常の中でも意識する児童が見られるようになった。



(4) 学校生活や家庭へつなげる

実践例 2 1年A (4) 個性の伸長

じぶんのいいところ「みんなじょうず」

(光村図書)

授業と実生活がつながるように、友達のよいところを次々に誉めていく「ほめほめりレー」という活動を取り入れ、互いのよさに目を向けさせた。担任も意図的に参加することで共感的理解を示した。2年前に実践した際には、事前の学級活動で友達のよいところ探しをし、それをカードに書き道徳ノートに貼っておくようにした。自分のよいところがなかなか見いだせない児童にはそのカードを見て考えさせ、自分のよいところを自覚できるようにした。授業で書いた「自分のよいところカード」にはよいところをもっとよくするためにはどうしたらよいかも書かせた。授業後は掲示し、自他のよさを継続

して認め合えるよう心がけた。また、家庭からも「〇〇のよいところ」として手紙を書いてもらう活動を取り入れた。手紙を受け取った児童は自分のよさを認めてもらえた喜びを感じることができた。このように、1時間の道徳の授業を学校生活や家庭生活へとつなげることができ、道徳教育の啓発にもなった。

(5) 心に響く教材の選択

ねらいに迫るためには、どんな教材が児童の心に響くのか、教科書に留まらず、新聞・絵本・映像資料などから吟味し、選択することも大切である。

実践例 3 1年D (17) 生命の尊さ

いのちをまもる

「はなちゃんのはやあるきはやあるき」

前任校で防災教育を研究していた際、東日本大震災での実話を基にした絵本「はなちゃんのはやあるきはやあるき」を教材として選択した。児童にとって身近な絵本を発問に合わせて区切りながら読み聞かせをした。絵本の主人公に共感しながら考えたり発表したりすることで、非常時だけでなく、日常生活での行動の積み重ねが「命を守る」ことにつながるという意識をもつことができた。

3 おわりに

道徳の授業は奥が深い。だから、道徳は難しい。故に楽しい。児童にとっても楽しみながら自己を見つめる時間になって欲しい。そう考えて指導方法を模索しながら取り組んでいるが、恥ずかしながら何か特別効果的な取組ができているわけではない。

今回、このような機会を与えてくださったことで、自己の実践を振り返ることができたことを感謝したい。そして、これからも児童が主体となり他者を認め合い、全員が活躍する授業を目指して、日々の実践を積み重ねていきたい。



一斉指導の中で有効なユニバーサルデザイン教育とは ―板書とノート整理を中心に―

県立生浜高等学校教諭 うえはら みわ 上原 美和



1 はじめに

本校は全日制と三部制の定時制の四つの普通科課程を有する県内唯一の学校である。単位制を導入しており、1科目45分授業×2時間連続の授業を実施している。子供たちの特徴として、ものの見え方や理解に個性をもっていたり、人間関係の理由からつまづき傷ついたりした経験をもつ生徒が少なくない。多くの生徒が苦手意識を変えたいという気持ちはあるものの、机に向かうことを敬遠する傾向にあるため、90分という時間をどう活用するかが課題となる。更に、外国籍生徒の増加も加速しており、手厚い個別指導を必要としている。以上のことから、授業における一斉指導の実践がより一層複雑な状況になっているが、工夫次第で平素の授業をよりよいものにできないかと考え、本研究を実践した。

2 実践と成果

(1) 授業のリズムづくり

① 仮説に基づいた授業構成

初回授業で、生徒の授業や教科に関する意識をアンケート調査している。結果を見ると、社会科は苦手だという意見が多数あった。理由は「暗記が多すぎる」「資料やグラフが読めない」「(情報が多すぎて)何を見たらいいかわからない」「じっとしていられない」「興味がもてない」等多岐にわたった。まずは授業に主体的に取り組めるような集中力の涵養を第一に考え、授業の骨子である板書・ノートづくりに焦点を置くこととした。

② 授業の構造化

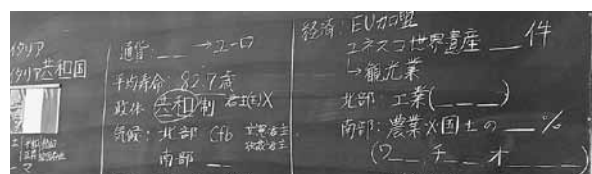
TEACCHプログラムを参考に、毎時の授業構成を **あいさつ(導入)→板書・机間指導→展開→結論・ノートまとめ・次回予告** というルーティンを作った。毎回同じ構成で行うことで、授業に見通しがもてるよう生徒のリズムづくりをねらったからだ。また、板書を授業の冒頭に据えたことは、「書く」行為によって集中し始めると私語が抑えられ、授業の導入として有効だった。

③ 学習活動は一つずつ/板書を写す時間を大切に

授業を行っていて気付いたことは、生徒にとって＜ながら学習＞は能率が悪いということだった。読み書き計算類推等、学習活動は一つずつ丁寧に行うことが授業で注意した点だ。また、毎時「板書をノートに写します。○分まで時間をとろうか。」と教師が簡潔に言葉かけをし、机間指導を始めた。この間は集中しきれていない生徒や支援を必要とする生徒と会話できる貴重な時間にもなっているうえ、日本語やノート整理が苦手な生徒を把握し、視覚的な課題をもつ生徒の確認ができたので板書を写す時間は有益と捉えている。

(2) 板書の工夫

① 虫食い板書



板書を行うにあたり授業のポイントとなる重要語句を文字数分空欄にしたものを板書

する。[展開]で説明を聞いてから[結論]でじっくりと空欄部分に語句を入れ反復しながらノートまとめをしている。

②文字の大きさ・チョークの色

空欄に埋める重要語句は色付きチョークを使っている。以前、赤が灰色に見える生徒や黄色と橙色の判別が難しい生徒がいたため、赤色で文字は書かない、重要語句は決まった色で書くようにして区別している。生徒に確認したところ、蛍光橙色が最も黒板から見やすいとの声を受けたため、現在はこの色を使っている。色の構造化を図ると、ノートまとめにも個性がみられ、自分なりに好きな色を使ったり、重要語句を欄外に記して自分なりの説明でまとめたりするようになった。

気候帯	特 徴	気候帯
A (熱帯)	ホーキサイト・酸化＝赤色＋鉄	→赤色×
B (乾季)	腐植層ない	→赤色×
C (温帯)	栄養○	→赤色×
D (冷帯)	栄養○	→赤色×

③地図資料やグラフについて

どの生徒にも視覚的な支援は有効で、図録や地図を活用すると興味をもつ生徒も少なくない。だが、地図帳等資料から自分の必要な情報だけを抜き取ることが難しく「地図帳の○ページ」と示しても一人で探せない生徒が多い。必要な情報だけを抜き出した補助プリントを配付してノートに添付するよう指示し、補助プリント学習後に資料集を確認している。

(3)ノート作成

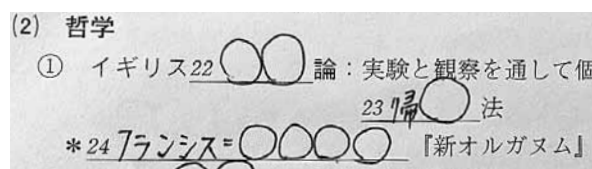
①理解度を図るものさし／反復学習に利用

ノートづくりに力を入れる理由は、確認小テストを実施した時、自分のノートを見ればわかることを通じ、成果の可視化から自信と学びの意欲を引き出すためである。

②板書をする生徒の反応と空欄の活用

前述の空欄があると、生徒はそれにあわせてスムーズにノートに写す。以前は、空欄に直線

を引くのみにしていたが「何文字分空けるの?」という声があったため、文字数分の下線を引くように改善した。文字数が明確だとバランスも取れるうえ、解説を聞く前のヒントとして印象付けられる。また、空欄ヒントは既成プリントに手書きで○印をつけるだけでも効果があった。

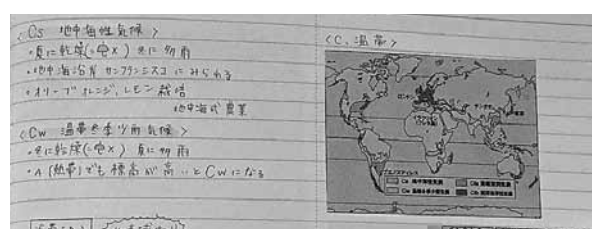


③ノート整理が苦手な生徒への対応

集中しやすい座席へ移動する、特定フォントで文字拡大した補助プリントを手渡す、教師用ノートを見せて書写する等、生徒の実態に合わせて行っている。特に視覚的な課題をもつ生徒に関しては、本人の希望を聞いて実態が公にならないよう注意している。

3 おわりに

考査前、仲間同士でノートを見せ合う姿を見かける。自分の作り上げたものが役立つことがわかり、平素の授業から工夫しようとしている生徒も出てきた。



個性的なノートが年々多くなり、評価やコメントをしていてとても楽しい。「苦手を克服したいから、また社会科をやりたい。」と選択授業の履修希望をだす生徒もおり、ささやかながら今後の指導のきっかけをつかめたような心持ちであるが、この始まりを大事にしてより深く生徒の意欲を引き出せる授業を行いたい。最後にと組にご理解・ご協力くださった関係の先生方に心より御礼申し上げたい。